

## フロロギア (1)

### 山内 昶

フロロギアといえは、フィロロギアかフレノロギアと関係のある字問分野と思われるかもしれない。だが、文献学や骨相学とは縁もゆかりもない。日本語の風呂とギリシア語の学ロギアとを結びつけたネオロギアなのだから。

ヒトは何のために沐浴するのかと問えば、清潔のためという回答が現代では即座に返ってくるだろう。確かにスズメもゾウも水浴びするし、ニホンザルにいたっては温泉浴を楽しむものまでいる。人類も太古から沐浴してきたことは、石器時代の遺跡から証明されている。

例えば日本では、上諏訪の縄文時代の温泉跡や湖底曾根の湯壺跡が示すように、旧石器時代から温泉に入っていたらしい。『魏志倭人伝』では、死者を葬ったあと、一家をあげて練ねりまぬをきたまま水中で澡浴していた。神話では、イザナギがイザナミのいる黄泉の国から戻ると、筑紫の日向の小門せとの阿波岐原あはきで、ケガレを落すためミソギ（身滌ぎ）をしていた。『万葉集』にも、「玉久世の清き河原に身祓みまきして齋いわふ命は妹が為こそ」をはじめ、ミソギを織りこんだ歌がいくつもあった。今日でも、神事や祭事に際して垢離をとる風習が沢山残っているし、志摩の漁村では、大晦日の夜に村人が一斉に海水で身を清める習慣が守られている。

西洋でも、水の礼拝、とりわけ温泉や塩泉などに対する崇拝はおどろくべき連続性を示すとして、エリアーデは次のような遺跡をあげている。<sup>(1)</sup>新石器時代のグリジの温泉跡やサン＝ソーヴールの泉跡、青銅器時代ではサン＝モリッツやベルティノ口の泉の礼拝跡など。これらが信者の沐浴を伴っていたかどうかは定かではないけれども、有史時代になると、神像を水に浸けてケガレ（褻枯れ）を払い、生命力を回復させて豊饒を祈る浸礼が、各地でおこなわれていたことは文献などによって明らかである。フリジアでは三月二七日のヒラリアの日に

母神キュベレーの沐浴が川や池でおこなわれ、アフロディテの沐浴はパポスでおこなわれていた。パウサニアスはシシオンでの女神の浸礼を記録しているし、カリマキユスも女神アテナの沐浴を歌っている。キリスト教のパプテスマも、全身を水に浸して罪を清める浸礼が本来の形式だったし、ヒンドゥ教徒のガンジス河での沐浴は余りにも有名だろう。イスラム教の寺院の前にも沐浴場があって、参拝する前にはそこで身心を清める習慣があることもよく知られている。

ところが一方では、水浴びであれ湯浴みであれ、部分浴だろうと全身浴だろうと、全く沐浴しない人々が世界には存在した。チベット人やアンデス先住民がその典型だが、一生風呂に入らないし、なかには水を怖がる人もいる。身体が黒くなるほど垢が積っているが、だからといって不潔で死んでしまうわけでも、罪深いわけでもない。西洋でもあれほど豪華なローマ風呂があつたのに、かなり長い間入浴の伝統はほとんどとだえてしまった。「ヨーロッパ、洗わずじまいで一千年」という戯れ言があつたほどである。むろんこれは白髪三千丈式の誇張だとしても、確かに西洋人は中世から近世まで余り、というかほとんど入湯しなかつた。身滌ぎをしないからといって罪深かつたわけではなく、逆に風呂に入らないことが聖者の徴とまでされたのである。ヒトはなぜ風呂に入るのかという問いに対する現代人の回答は、だから普遍性をもたなかつたことになる。

フロロギアを展開するためには、水のシンボリズムから入らねばならないところだが、そのためには一書が必要とする。本稿では照準を日欧の風呂文化にしぼって、なぜ西洋人は風呂嫌い日本人は風呂好きなのか、それが近代にいたって清潔という衛生観念のもとに一致してきたのか、そうした問題を駆け足で辿ることで、簡単な比較文化論的考察をおこなっておこう。

## 一 西洋の風呂

### 1 古代ギリシアの風呂

古代ヨーロッパで入浴の習慣があつたことは、多くの遺跡や文献から明証されている。

まず、源流のオリエントから始めるが、シュメール人は紀元前四〇〇〇年末頃の都市ウルクの神殿のなかに沐浴室を造っていた。これは入口と神殿内部とのほぼ中間に位置していたので、ここで身体を淨めて参拝したのだろうと推定されている。紀元前三〇〇〇年頃のエシユヌナ宮殿でも沐浴室が五カ所見つかっており、「ジムリ・リム王（紀元前一七八二〜前一七五四）の宮殿では、陶製の二個の浴槽と、トイレが組み合わされた部屋が見つかっている。また、王が用いたと思われる浴室も見つかっており、この部屋では二個の浴槽とその浴槽への給水のためと思われる平底の大きな壺が配置されていた」と、吉田集而は川瀬論文によって記述している。

古代エジプトでも、テルエル・アマナル遺跡のイクナートンの街で紀元前一三五〇年頃の小浴室が発掘され、一種のシャワーも備えつけられていた。上流階級では日中に二度、夜間に三度と頻繁に入浴する習慣があり、三日毎に全身の毛を剃り落していたそうである（この毛剃りの風習はその後ムスリムにも伝わった）。「淨身は生命の母」という格言があった、と藤浪剛一は伝えてくれている。

ギリシア人の沐浴の習慣はオリエントからきたのではないかとされているが、クレタのクノッソス宮殿（紀元前一八〇〇〜前一四五〇年頃）からは給排水設備のついたすばらしくモダンな女王の浴室が発見されている。アシの模様をつけたそのテラコッタ製の浴槽は現代のバスタブと見紛うほど立派なもので、隣の部屋には水洗式のトイレもあった。

一般庶民の家にもこうした美事な浴室があったとは思われないが、宮殿近くの隊商宿には足洗い用の風呂が設けられていたらしい。「この風呂は、およそ六フィート×四フィート六インチ、深さ一八インチ。ミノア人は背が低かった。だからふつうの人なら、そこで坐浴もできたらう」といって、ライトはその給排水設備の精巧さを詳しく解説している。別室にはテラコッタ製の浴槽がいくつか発見されており、恐らく温水も供給されていたのではないか、というのである。

ホメロスは『オデュッセイア』のなかで何度か風呂について言及していた。疲れた旅人はたいてい温かい風呂に迎えられる。熱い湯が浴室に運ばれ、金属製の浴槽で「快適になるまで冷まされた」。ネストールの末娘、美しいポリュカステがテレマコスに入浴させる。「豊かなオリイヴ油をその肌に塗りつけ、それからチュニカと外衣をまとわせた。それで彼は、不死の身をもって浴室を出てきた」。この浴槽は中に座る席があり、上からも湯を注ぎかけたらしい。前五世紀頃になると、公共風呂も造られた。部屋の壁に人体を入れる大きさの凹みがあるりとくりぬかれたこの浴槽に腰かけて、頭上からの湯を浴びる一種のヒップバスで、ギリシア語でバラネイオン (balaneion) といった。

ギリシアにはもう一つ別系統の風呂もあった。いわゆるギムナシオンで、競技場のトラックや体育施設に付属して、スポーツの後汗を流すためのシャワー設備があった。紀元前五世紀頃から造られ始めたといわれるが、元来これは冷水浴のためのものだった。紀元前三世紀頃になると熱気浴室も付設された。吉田によると、「初期の熱気浴は、火を焚くか焼いた石、あるいは火鉢のようなものを用いていた。部屋は小さく、円形でドーム状の屋根を持ち、部屋の中心に囲炉裏がある。そして、囲炉裏の周りには木あるいは石のベンチがある。火を焚いたり火鉢を用いるものは熱気型であり、焼き石を用いるものは水をかけて蒸気を出させる熱気・蒸気型であると考えられる。後にこの風呂は床の下から温めるタイプに変わっていく<sup>(5)</sup>」。

こうしたアステティック・ジムには小さいながらも討論室や講義室が付いていた。ギリシア人は健全な精神は健全な肉体に宿る (*mens sana in corpore sano*) と信じ、心身の調和的發展を理想としていた。頭の体操と身体体操をここで同時に起こさない、疲れた心身を沐浴によって回復させようとしたのである。風呂にはしたがってミソギや浸礼のような神秘的、宗教的なニュアンスは余りなかったようである。後にこのギムナシオンがバラネイオンと融合すると、ローマ風呂の原型となるだろう。

## 2 古代ローマの風呂

ローマがギリシア文化をひきついだことはよく知られている。当然その中には風呂文化も含まれていた。

初期のローマでは、台所の隣りにラヴァトリナ (*lavatina*) という、小さくて薄暗い浴室があり、台所から運んできた湯を貯めて、週に一度位は身体を洗っていたらしい。そうした設備のない家庭では川で水浴していた。昔の日本の行水か川浴みのような、まだ極めて素朴な沐浴法だったわけである。

ところが、バラネイオンの系統をひいてローマではバルネア (*balnea*) という形式の風呂ができ、さらにギムナシオンの系統とミックスされて全く新しいローマ式の風呂、すなわちテルマエ (*thermae*) が、ほぼ紀元前一世紀頃から出現してきた。この構造には、イタリアのプテオリで近くの温泉から蒸気をひいてカキの養殖場を温めていたセルギウス・オラータの考案による床下暖房法<sup>ヒュポカウストラム</sup>が、大いに役立ったとされている。温湯の保温や熱気浴が可能となったからである。ギリシア式の風呂との大きな違いは、体育・競技施設がしだいに小さくなって、

代わりにいろんな娯楽設備が充実してきたことと、女人禁制だったのがテルマエでは男女混浴が認められるようになったことだろう。

一番古いテルマエは紀元前二六〇前一九年に造られたアグリッパの大浴場だった。長さ一〇〇〜一二〇メートル。幅八〇〜一〇〇メートルもあって、おそらく人類史上最初の大規模な浴場だった。だがこれで驚くのはまだ早い。三世紀のカラカラ大浴場は一二万平方メートルの広さで、一度に一六〇〇人が入浴できたといわれ、四世紀のディオクレティアヌス大浴場は敷地面積は同じ広さだったが建物のほうはカラカラ大浴場よりも大きく、ほぼその倍の収容力を誇っていた。

こうしたテルマエはふつう午後一時から——ローマの労働時間は大体午前中だけだった——開かれ、入浴料は二分の一アス〜四分の一アスほどで誰でも払える低廉な値段だった。四分の一アスをクアドランスといったが、これは「一文銭」ないし「無価値なもの」の意味にも使われていたのである。女性は髪を洗うので倍額とされたが子供は無料だった。当然維持費は収入をはるかに上廻ったが、その差額は皇帝や有力者が負担した。人民から与えられた富や権力をお返ししなければならぬという、人類の黄金律である互酬性が作動していたのである。日本の政治家に見習わせたいと思う人もあるかもしれない。

入湯の手順についてちよつと説明しておこう。まず脱衣室 (apodyterium) で服を脱ぎ、冷氣室 (frigitarium) に入って汗を落とし、暖温室 (tepidarium) でぬるま湯に浸り、オイルを塗ってもらったり、垢をこすり落としもらう。ついで高温室 (calidarium) に移り、四〇度ほどの湯に全身を浸ける。さらに気が向けば熱気浴室 (laconium) で発汗させて、再び入ってきた順序を逆に辿って、フリギタリウムで冷水浴をするという方式になっていた。つまり、冷↓温↓熱↓温↓冷と徐々に暖まってゆき、また徐々に冷やしてゆく方法を取り、そのため浴場は往復型と一廻りする循環型との二つの基本構造があった。

入湯は食欲を増進させると考えていたから、食べては吐き、吐いては食べる、名だたる美食家大食家のローマ人は、食後の一服に風呂に浸ってまたぞろ食卓に向かったといわれている。宴会などに招かれた時も、入浴してから出かけるのが礼儀だったことは、ペトロニウスの『サチュリコン』で描写されている。一日に七〜八回も風呂に入った皇帝もいたし、ネロ (在位五四〜六八) は莫大な費用をかけて海水を宮殿にまで運びこませ、潮風呂を楽しんだ。その妃ポッパエアはロバの乳を沸かして入浴し、旅にでる時には何千頭のロバをひきつれて随時ミルク風呂をたてさせて全身美容にはげんでいたことは有名だろう。プリニウスによると、天井からロープで吊り下げた揺籃のようにゆら

ゆら揺れる浴槽まで考案されていたらしい。テルマエには浴場だけではなく、いろんなスポーツ施設や劇場、集会場、図書館まで付設され、飲食店も周辺に沢山あった。男女混浴だったので、しばしばいかがわしい破廉恥な行爲もおこなわれていたらしい。まさにそれは一大文化センター、というより一大娯楽センターだったのであり、四世紀のローマにはこうした公共浴場が一一、私設風呂が八五六もあったといわれている。

当然そのために必要な燃料や水も莫大な量にのぼった。一三本の水道橋によってローマに水がひかれていたが、吉田によると、一日の給水量は八五〇〇万〜三億一七〇〇万ガロンで、そのうちの四〇パーセントが公共の建物、噴水、浴場に浪費されていた。ライトによると、最高時の一日一人当りの給水量は三〇〇ガロンもあり、これは一九五〇年代のロンドンの約五一ガロン——但しそのうち三四ガロンが家庭用、一七ガロンが工業用——の約六倍にも達していた。<sup>(6)</sup>ローマ滅亡の遠因は風呂にあった、とプリニウスが嘆いたのも故なしとはしないのである。

### 3 中・近世の風呂

五世紀末にローマ帝国が崩壊するとともに、ローマの風呂もあえなく崩壊する。テルマエに大量の水を供給していた水道橋は、六世紀初頭にはゲルマン民族の手で破壊されてしまった。ただ東ローマ帝国では小規模ながらも浴場が存続し、後にこれがイスラムの風呂文化に影響を及ぼすことになる。一方、ローマ帝国の全盛時代にその支配の象徴として西欧各地の都市に浴場が建設されていたが、これも帝国の消滅とともにほとんど消滅してしまった。こうして、垢にまみれた一千年がヨーロッパで出現することになる。

たとえば、三〇四年頃に一三歳で殉教した聖アグネスは、死ぬまで一度も身体を洗ったことがなかったといわれるし、六世紀に設立されたベネディクト修道会では、病人は別として、健康な修道士には年数回の入浴しか認めなかった。一〇世紀のことになるが、コルドバのウマイヤ朝カリフの使節としてオットー一世のもとに赴いたイブン・ヤアクープは次のような記録を残していた。

フランク人ほど不潔な人間はおらず(中略)、年に一度か二度、冷水で身体を清めたり洗ったりするだけで、着物は一旦着ると、あとは擦り切れるまで洗いもしない。<sup>(7)</sup>

次の世紀、神聖ローマ帝国ハインリッヒ四世の母、聖アニスは一生涯入浴を自らに禁じたことで聖別されたと伝えられるし、リエージュの司教レジヤンハールは生涯一度も浴場に足をふみ入れることなく、その後継者ニタールが浴槽内に腰を下ろしたのは回復の望みのない病いに冒されて最後を迎えた時だけだった。「入浴しないことが聖人の徴となった」と、ポローニユはいつている。

こうした事例からすると、西洋中世の風呂嫌いは、キリスト教が原因だったと思われるかもしれない。確かに初期キリスト教では、肉の快楽が極端に忌避され、厳格に禁止されていた。とりわけローマ末期のテルマエは、淫蕩放埒の悪しき快楽の楽園と化していたので、キリスト教徒は風呂に入らないことで肉体の不潔とひき換えに魂の純潔を守ろうとし、異教徒から自分たちを区別しようとした。垢の量が信仰の深さを有徴化していたのである。ドイツで布教していた聖ボンファティウスが七四五年に男女混浴を禁止し、修道院では温水浴が身体をしたがってまた精神までも弛緩させるといっているので、もっぱら冷水浴しか認めなかったのもそのせいである。

とはいえキリスト教だけが、西洋人の垢好きの原因だったわけではない。というのも、教会が魂の聖域だけではなく、世俗の生活の隅々までも厳しく規制していた時代だったのに、上流階級の人々は結構風呂に入っていた記録が残っているからである。たとえばシャルルマーニュ大帝(七四二―八一二)の宮殿には大浴場があり、一〇〇人以上が入浴できたといわれるし、『トリストアンとイズー』や『パルチヴァー』を始め、その他の中世物語には、客人をもてなすために騎士が入湯をすすめる話がよくでてくる。イギリスのジョン王(在位一一九九―一二一六)はほぼ三週間ごとに風呂に入ったと伝えられるし、ウェストミンスター宮殿には固定浴槽がタイル張りの床にうめこまれ、冷・温水装置まで完備した浴場が設けられていた。

このような中世の風呂の復活に大きく貢献したのは、一一世紀末から始まった十字軍の遠征だった。東ローマ帝国からイスラムに伝わった入浴の習慣がふたび西欧に伝えられたのである。その多くはトルコ風の蒸風呂で、一一三〇年代にドイツのゾーストに最初の公衆浴場が造られ、一二九二年の人頭税台帳にはパリで二六軒の蒸風呂屋のあったことが記録されている。「ギルドに編成された商売として風呂は、日常生活のなかに溶けこんでいた。気軽に利用される場所であり、蒸し風呂屋に遣ることが職人、奉公人、人足などへの駄賃がわりになることもよくあった。『ジャン・プチおよびその朋輩の小姓にたいし、王妃は元旦に蒸し風呂屋に出かけるのをお許しになる。メめて一〇八スー。』この金額であれば、蒸し風呂にくわえて、桶風呂、ブドウ酒、食事、さらに寝台を追加注文できたはずである」と、ポローニユは解説

している。イギリスではリチャード二世(在位一三七七―九九)治下で、ロンドンの浴場(スチュー)(蒸風呂のことで、料理のシチューと同じ言葉である)はサウスワークだけでも一八軒を数えた。こうした風呂の復活にはまた、金持ちが死後の自分の魂の救済のために遺産の一部を寄進して公衆浴場を造らせ、貧民や病人を入浴させる「救霊入浴」(パルネア・アニマルム)の制度があつたといわれている。

ところが、ローマのラコニウムが西欧で再び開花するとともに、またぞろあのローマ風の逸楽と淫楽の風習も満開になってきた。一三世紀の『バラ物語』には、仮病をつかつて焼きもち焼きの夫を瞞し、蒸風呂屋で愛人と逢引する女性の話がのっている。一五世紀のことになるが、民謡で有名なアヴィニヨンの橋の蒸風呂屋は「きれいな旦那衆ときれいな奥方衆」が逢引きする場所として有名だった。こうした乱行を防止しようとして、一四世紀頃から当局は男女の入浴の曜日を別々に定めたり、風呂屋をジェンダー別に分けたりしたが、エロスの情熱に融かされない防壁などなかった。そこでフランスのアラゴン一世(在位一五二五―四七)はリヨンの風呂屋町の撤去を一五三八年に命令し、「デイジョンの四軒の蒸し風呂のうち最後までがんばっていた一軒も一六世紀の半ば頃にとり壊された。ボーヴェ、アンジエ、サンスなどにあつた蒸し風呂屋も、一六世紀末までには姿を消した」と、ヴィガレロはいつている。

同じ頃、ヘンリー八世(在位一五〇九―四七)のイギリスでも次のような条令が制定された。

売春婦や悪名高い女性が入りする、男性の慰安と健康のための温水風呂ないし蒸し風呂を保持・経営するところ。あるいは、女性専用と定められた温水風呂や蒸し風呂でありながら、若い男性や人品芳しからぬ者らのたまり場となるところ。また、男性用・女性用とを問わず、市の条件にしたがつて自己の正業を当局の収入役に保証しえなかつたり、条例に反していかなる者にせよ夜間宿泊させたところ。このような浴場があれば、罰金として議会にたいし二〇ポンドを没収されるものとする。<sup>(11)</sup>

だが一片の条令や罰金ぐらいで悪の巢窟が消えうせるはずもなかった。そこで王ヘンリーはスチューの閉鎖を法令で命じたのである。

復活した風呂が一六世紀になってふたたび消滅したのは、しかし何も風俗紊乱のせいばかりではなかった。大航海時代が始まって大型船舶の建造のため大量の木材が必要となつて、薪が不足したこと、またこの頃浴場が一種のアジールとなつていて、犯罪者や反逆者の温床にしばしばなつていたことがその理由にあげられる。とはいえ何よりの要因は、ペストの流行、ついで新大陸侵略の返礼にもつた梅毒の流行にあつた。ペストは一四紀中葉から全ヨーロッパで猛威をふるい、人々を恐怖のどん底におとし入れたが、その後も一七世紀まで黒死病



の波は断続的に西洋を襲い、まだペスト菌が発見されていなかったので、風呂がその有力な感染源だと当時は信じられていたのである。スピロヘータ菌のほうは、コロンブスの一行がアメリカからもって帰り、一四九四年のフランス王シャルル八世のイタリア遠征を契機に、たちまち爆発的に全ヨーロッパに伝播していった。淫楽の場所である風呂屋がその媒介源となったことはいうまでもない。

こうして入浴の習慣はまたしても西洋から姿を消してゆくことになる。じじつ太陽王と称されたルイ一四世（在位一六四三―一七一五）は古代ローマを模した立派な浴室をヴェルサイユ宮殿に造らせていたのに、生涯にたった一度しか使わなかったという伝聞がある（もともとこれは作り話のようで、年に一回ぐらいいは入浴していたようだが）。王の侍医となったルイ・サヴォは一六二四年にこう高言していた。「風呂も蒸し風呂もフランスでは必要ない。今のわれわれには、体を清潔に保つための下着があるので、風呂や蒸し風呂がなくても古代の人たちと同じように快適に過ごすことができる」と。但し、太陽王のベッドにはノミやシラミが一杯いたという裏話があるから、下着に吸血鬼が忍びこんでいなかったかどうかは保証のかぎりではないが。

イギリスの海軍大臣サミュエル・ピープスの『日記』は有名だが、一六六〇年から九年間の日々の記録には、妻のエリザベスが風呂屋に行った事実はたった一回しか誌されていない。

顔は綿でぬぐい、手足は水で洗い、身体の垢は布でこすり、下着を頻繁にとりかえていたにしても、清潔度はやはり風呂に入るより落ちるだろう。逆にいうと「臭い、汚い」という不潔度ははるかに高い。ところが、当時の医学的常識では、強烈な体臭は生命力の発現だという信念があった。臭ければ臭いほど健康な証拠であり、動物精気を発散させてセックス・アピールをふり撒いたのである。だが余りにも悪臭がひどく、鼻をつままねばならぬようなら逆効果になる。そこで消臭のために竜涎香や麝香といった強烈な匂いのする動物性の香水がふんだんに身体にふりまかれた。口臭消しには没薬入りのボンボンが好まれた。ヨーロッパでの香水の発達は風呂嫌いに関連していたのである。とはいえ、体臭と香水とが相殺効果を発揮したか、それとも両者相俟ってますます腐敗臭を高める相乗効果があったかは、これまた保証のかぎりではないが。

そうした高価な香水や下着を買えない一般庶民は、夏だけのことだが、セーヌ河にとびこんで分泌物を洗い流していた。面白いエピソードがあるので紹介しておこう。シャルル九世（在位一五六〇―一七四）が廷臣を従えてテユイルリを散歩していた時のこと、突然イヴの姿の

ままで一人の美女が堤に現われるとセーヌ河にとびこみ姿を消したが、また水面に現われると稲妻のように岸にかけ上り、髪を絞って走りさった。廷臣たちに動揺が走った。「彼女は水の中にとびこんだが、見物人を火の中に投げこんだ」と、ピエール・ド・ランクルは『なべて移ろいゆくものの情景』のなかで洒落て記録している。しかし一七世紀になると、神の削ったままの姿でパリの真中で水浴する者は、男女を問わず警察の取締りの対象とされるようになってきた。裸体にたいする感性の変化が萌しはじめたのである。もっともルイ一四世もその父の一三世もしばしばアダムの姿のままパリ郊外のセーヌ河で水浴して、王者の特権を誇示してはいたのだが。

#### 4 近代の風呂

啓蒙の世紀になると、旧制度にたいするフィロゾフたちの批判、攻撃やブルジョアジーの台頭につれて、当然のことながら古いもの考え方や感じ方がゆっくりと変化してきた。風呂文化としてその例外ではありえない。悪臭に代わって、清潔感が宮廷でも性フェロモンの機能を発揮するようになってくる。

たとえばルイ一五世(在位一七一五―一七四四)の愛妾だったシャトールー夫人は入浴シーンを自分の権勢を誇示する手段にしていた。浴室のドアを半開きにしてそこに国王をたたせ、次の間の寝室に廷臣たちを控えさせて、美しい肢体をゆっくり湯に沈めていた、トリシュリュール元帥はその『忘備録』に書き残しているからである。この当時貴婦人たちは風呂に入りながら司教や高官と平気で接見していたというから、入浴の習慣が普及していたことが判るだろう。もっとも浴槽にはミルクやハーブなどを入れて透けて見えないようにしていたが。ルイ一六世妃のマリー・アントワネットはとりわけ風呂好きで、毎日入浴していたし、王妃付きの女官アンパン夫人の『回想録』によると、朝から足湯を使っていたらしい。ナポレオン一世も風呂好きで毎日熱い湯に入っていた。シャンデリアまでついたその豪華な浴室はエリゼ宮に復元されて現在もみることができ(ついでにつけ加えておくと、ウエリントンには水風呂に入っていたからワートルローの戦いはフリギタリウムとカリダリウムの勝負だったことになる)。皇妃マリー・ルイズも風呂好きで毎日温水水浴をしていたが、頻繁に入ると出産力が低下するという理由で侍医から過度の入浴を禁じられていたらしい。風呂にたいする古くからの警戒観が『理性の時代』になってもまだ残存していたことを物語っている。

とはいえ、この当時、自分の館に浴室をもっている貴族やブルジョアの数はまだごく少数だった。一七五〇年頃の大邸宅の図面の調査によると、九三の豪華な個人住宅のうち、入浴のための空間がある館はわずか七例、つまり七・五%にすぎなかった。<sup>(13)</sup>

上流階級のこうした清潔志向に影響されて、パリでもこの頃から公衆浴場が最終的に復活してくる。これには二つあって、その一つはセーヌ河に浮かぶ有名な湯船だった。最初のポトヴァン浴場船は一七六一年に造られ、川水を使った冷水浴と温水浴の両方ができ、汚水はそのまま河に流す仕組みになっていた。客の評判がよかったので、その後一八〇〇年までに五つも建設されている。

もう一つは陸上の公衆風呂だが、これも一八世紀中葉にはパリ全体で十数軒数えられた。公衆浴場といっても、日本の銭湯のような共同大浴場ではなく、浴場船同様、小さく仕切られた個室に浴槽が備えつけられている構造で、この伝統は現在のパリのバン・ピュブリックにもひき継がれている。近代の成立とともにプリアヴィアシーも成立してきたのである。

公衆浴場とはいっても、入浴料はとてつもなく高かった。安い中国風呂でも二四スー、高い所では六リーヴルもしたから、当時の労働者の日給の二倍から六倍もしていた。これではとても一般庶民のゆけるところではない。当然顧客はハイ・ソサイエティーの人々ということになるだろう。庶民は自分の家で湯にかかればよいと思われるかもしれないが、大革命前夜の頃、パリでは水売りから買う一立方メートルの水が三リーヴルもした。これは労働者の日給の三倍に当たるうえに、各戸で湯水を使える特別な空間がなかった。そこでどうしても身体を洗いたい時には庶民はやむなく足湯か腰湯の部分湯ですますより仕方がなかったのである。一七八九年、『タブロー・ド・パリ』のなかでメルシエはいつている。「二四ソル払えばタオルのサーヴィスははいけれど、河の上で温水浴ができる。そこでパリの住民は垢落としもできずである。ところが、パリの住民の半数は生涯、身体を洗わず、風呂にも入らない<sup>(14)</sup>」と。入浴が一七世紀と一八世紀を区別するとともにまた上層・下層をも差異化する文化記号になっていたことが判るだろう。

大革命後、ブルジョアジーが権力の座につくと、風呂の普及もいっそう発展してくる。一方では、上流階級の大邸宅で豪華な大理石や金銀珊瑚の彫金のついた固定浴槽のある浴室が経済力をみせつけていた。他方では、庶民は、ドミエの風刺画に描かれたように、困いと覆いのあるセーヌ河の粗末な四スー水浴場で夏場に垢を落としていた。この階級的両極端の間隙を埋めるものとしては、出前風呂が流行した。これは一八二〇年代から始まったもので、湯をつんだ馬車を家の前まで注文に応じて運んでゆき、ポンプで浴槽に給湯し、終わったらまた

ポンプで残り湯をくみだして、道路に放流する方式である。まだ給排設備の完備していなかった時代の苦肉の策といえるが、プブル階級の需要は結構多かったらしい。なぜこんな面倒なことまでして風呂に入ったかという点、この頃コレラの流行もあって、清潔が美德であり社会の善であって、不潔は悪徳であり社会の害悪だという衛生観念が徐々に普及し、社会下部にも浸透しはじめてきたからだ。清潔が美德であり

この点で興味深いのは、ナポレオン三世(在位一八五二―七〇)の民衆用浴場建設の構想だろう。清潔の習慣が身についた家庭では秩序と健康が支配しているが、不潔な家庭は悪と無秩序の温床だという時代のイデオロギーに基づいて、彼は内帑金で貧民用のモデル浴場をキヤファレリ街に造らせた。一八五五年のことである。料金は温浴で二五サンチーム、水浴で一〇サンチーム、タオル二枚で五サンチームと極めて安かった。但し入浴時間が長すぎると、かえって衛生に悪いという理由から、三〇分たつと蛇口から湯水が出なくなる装置がとりつけられていたが、イギリスのパブリック・バスはもっと冷酷で、時間がくると浴槽の排水口が外からあけられて、お湯がぬきとられてしまう仕組みになっていた。

この実験浴場は当初労働者に歓迎されたが、しかし資材や建築が悪く、管理もいい加減だったうえに、利用者の器具の扱い方も乱暴だった。管理・運営コストが高くつき修理もままならず、すぐに老朽化が始まって一〇年足らずで結局とり壊されてしまった。失敗に終わったとはいえ、労働者の再生産を目的として、労働者の身体管理と社会の秩序管理を一つに結びつけようとしたこの試みは注目し値する。だが、この問題については次号で論じよう。

一九世紀末はまた、珍妙な風呂がいろいろ考案された時代でもあった。折畳み式、テーブル式、長椅子式、洋服箆筒式浴槽など。なかでも奇妙なのに、回転式風呂、バナネ式風呂、シャワー付き自転車ゴーランドなどというものであった。特許の段階にとどまったとはいえ、これらの発明は、身体管理としての風呂への関心が急激に高まったことを示している。

とはいっても一九世紀全体を通して見ると、伝統的な風呂嫌いの傾向はやはり顕著だった。一八八六年のアンケートによると、平均的ドイツ人は三〇年に一度しか入浴しなかったという調査結果がでている。フランスについては、一八一九年のパリの人口は約七〇万人だったが、年間の入浴延べ回数は六〇万回、一八五〇年の人口は一〇〇万をこえていたが、入浴の延べ回数は二〇〇万回にすぎなかった。ルイ一八世の王政復古期には年に〇・八五回入浴していたのが、ナポレオン三世の時代にはその倍以上に増加していた。それでも年間二回足

らずである。別の統計によると、一八五一年と六八年の調査ではパリ市民は一年に一度しか風呂に入らなかった。生涯全く入浴しなかった一〇万人を除外しての話である。一八九二年のマルタンの調査では、パリの住民は平均して二年に一度しか風呂に入らなかったとされているから、資本の要請に応じて公衆衛生学者が入浴キャンペーンをくりかえしていたにもかかわらず、入浴頻度は遅々として上昇せず、上下変動を描いていたことになる。ついでにつけ加えておくとパリの住居全体のうちで浴室のある家庭は、一八五〇年で〇・四%、一九〇〇年になっても二・六%にすぎなかった。<sup>(15)</sup>だから本当に風呂が普及し、入浴の習慣が定着するのは、二〇世紀に入ってからのことにはかならない。一体なぜ西洋人はこれほど風呂嫌いだったのだろうか。だが、この問いに答える前に、今度は日本の風呂についてこれまた駆け足で見えておかねばならない。

#### 註

- (1) エリアーデ、一九六八年、七六頁
- (2) 吉田集而、一九九九年、七九頁
- (3) 藤浪剛一、一九四四年、四五頁
- (4) ライト、一九九四年、二六頁
- (5) 吉田、前掲書、八六頁
- (6) 吉田、同前、九八頁。ライト、前掲書、三六頁
- (7) 杉田英明、一九九九年、五五頁
- (8) ボローニユ、一九九六年、二二頁

- (9) ボローニユ、前掲書、三〇頁
- (10) ヴイガレロ、一九九四年、三〇頁
- (11) ライト、前掲書、九一頁
- (12) クセルゴン、一九九二年、三一頁
- (13) ヴイガレロ、前掲書、一三〇頁
- (14) 同、二〇八頁
- (15) クセルゴン、前掲書、二七八頁、二五八頁

#### 参考文献

ヴィガレロ、一九九四年『清潔になる(私)』、見市雅俊訳、同文館  
 エリアーデ、一九六六年『豊饒と再生』著作集2、久米博訳、せりか書房  
 クセルゴン、一九九二年『自由・平等・清潔』、鹿島茂訳、河出書房新社  
 杉田英明、一九九九年『浴場から見たイスラーム文化』、山川出版社

藤浪剛一、一九四四年『東西沐浴史話』、人文書院  
 ボローニユ、一九九六年『羞恥の歴史』、大矢タカヤス訳、筑摩書房  
 吉田集而、一九九五年『風呂とエクスタシー』、平凡社  
 ライト、一九九四年『風呂トイレ讃歌』、高島平吾訳、晶文社